



岳陽の町は、洞庭湖の東岸を南北にのびている。むかしから幾多の文人や詩人がここに逗留して詩詞を物し、それらの多くは歴史の淘汰をくぐりぬけて今に伝えられてきた。中国名詩選や唐詩選などをひもとくと、岳陽や洞庭湖を詠んだ歌の豊富なことに驚かされる。なぜ、それほどまでにたくさんの方々の文人や詩人がこの辺鄙な小邑にやってきたのだろう。どうも、それは中国大陸における岳陽の地理と関係しているようだ。

地図を開くと一目瞭然なのだが、岳陽は中国のへそともいえる湖南省の北部に位置し、揚子江、長江の水圧で動脈瘤のように膨れた湖を擁している。古来、洞庭湖の水運は四通八達し、江西、湖北、四川はいうまでもなく、湘江や贛江を伝って貴州、雲南、浙江、福建、広東方面にまで移動することができた。あるいは揚子江を介して大運河に漕ぎ入れれば、江蘇、河南、山東、河北などの北部中国にも行けたのである。清末、广西桂平県の金田村に挙兵した太平天国軍は湘江を遡行して洞庭湖に達し、岳陽で拡軍した。ここで水軍を主力とする兵力を激増させたのである。

近年、岳陽を訪れる遊山客はおもいのほか少ない。近代以降、時代は水運よりも利便のよい鉄道や航空を交通の花形にした。ために陸路も空路も不便な

岳陽

特集

[文・写真] 中村達雄

text & photo: Nakamura Tatsuo

洞庭湖畔の古鎮

立地は、この町を陸の孤島に格下げしたにちがいない。

京広鉄道の旅

深から鉄道の旅客になる。数少ない岳陽止まりの特急寝台だ。晩の10時前に発車した列車は日付が変わるころ広州を通過し、そこから京広線を北へ驀進する。眠っている間に韶関を経て広東省から湖南省に入り、やがて朝になった。同室の青年が降り支度を済ませてそわそわしている。なかなか衡陽に着かないというのだ。夜間に不具合でもあったのか、列車は予定を一時間ほど遅れて走っていた。衡陽の次は株洲に停車する。あまり馴染みのない駅名だが、江西や上海、貴州、雲南へむかう車両はここで線路を乗り換える。南中国における鉄道の要衝であるらしい。

列車は湖南省の省都長沙をすぎ、最後の行程を北進する。やがて左の車窓に小さな河川や湖沼が頻繁に展開し始める。洞庭湖が近くなってきたのだらう。楚の屈原が投身したといわれる汨羅江は岳陽南郊を流れて湘江に注いでいる。汨羅をすぎれば、目的地はもう目と鼻のさきだ。正午近く、列車は10001キロの遠路を14時間かかって岳陽駅にすべりこんだ。

洞庭湖上から岳陽楼を望む

駅前広場は、他の諸都市と同じように中国的な雑踏におおわれている。站前路（駅前通り）を流している車をひろって宿舎にむかう。駅やホテルで客待ちしているタクシーよりも、街路を流している運転手の方がはるかにまじめなのは、この国の一般常識である。

沿海都市から払い下げられた旧式の上海サンタナは岳陽の町を東西に貫通するメインストリートの巴陵路を東にむかう。5分も走ると道は洞庭路にぶつかった。駅周辺の繁華街は散らかった感じのするざらついた町並みであったが、湖畔を南北に縦走するこの街路は清代の建築物が連なり、その落ち着いた風情が好ましい。

車は岳陽楼公園の至近にある岳陽楼賓館の門前に止まった。小規模な安宿だが、服務員は素朴な親切の心があり、改装したばかりの客室は質素な清潔感にあふれている。繁華な中心街ではなく、ホテル近辺の洞庭路界隈がこの町の品格を守っているようだ。

岳陽楼に登る

江南には三大名楼とよばれる古建築がそびえている。武漢の黃鶴楼、南昌の滕王楼、そしてここ岳陽楼である。魏、呉、蜀の三国が鼎立した時代、呉の名將

魯肅が建安20（西暦215）年、水軍の訓練と閲兵、当地の鎮守を目的として建てた閩軍楼が岳陽楼の前身である。水軍は当然のことながら洞庭湖を根城にした。湖面に浮かぶ水軍を閲兵するには高度が必要になる。だから、岳陽楼は湖畔の丘の上に高くそびえていた。魯肅と云えば、劉備（蜀）と謀って曹操（魏）指揮下の兵船や陣営を焼き討ちした赤壁の戦いで現代にも知られる。その赤壁は、岳陽の北東およそ100キロ口の京広線沿いにある。

岳陽城を構成する古建築群はいま、岳陽楼公園とよばれる管理区域内に大事に保存されている。入園するとまず眼に飛び込んでくるのが碑廊とよばれる廻廊風の建物である。65枚の石碑を嵌め込んだし字型の建屋は中庭を包み込むようにたたずみ、見学者に心地よい日陰を作ってくれるから嬉しい。すぐ左手に屹立する岳陽楼への登楼は後にして、楼壁に穿たれた岳陽門をくぐり湖畔に降りていく。20メートルほどのトンネルである。かつて洞庭湖から岳陽城に入るには、この門以外の道はなかった。東西南北への水運が盛んだった湖に対して堅牢な護りを固めていたことがわかる。

門を出ると急峻な階段が続ぎ、それを降りきった湖辺に点将台とよばれる舞

岳陽楼



岳陽門



鉄枷



岳陽樓に登る

台がある。あいにく門扉で堅く閉ざされ、鉄格子を隔ててしか見ることができない。点将台とは水軍の将兵を点呼した場所のことである。そこから30メートルほど離れたところに、鉄枷が安置してあった。長さ2.6メートル厚さ0.34メートル、重量3.5トンのX字形をした鉄塊で、現存する3枚のうち1枚がここに展示されている。北宋時代に編まれた岳陽風土記はすでにこの鉄枷を「古物」と記しているが、はたしてどの時代に造られたものなのかは不明であるらしい。中央部などに幾つかの丸穴が穿たれているので、兵船の繫索に使われたとか、湖の護岸、あるいは鎮邪、悪病予防など幾つかの説が唱えられている。諸説はいずれもお伽めかしく、本当のところはよくわからない。

湖畔の石畳にそって南に歩を進めると、ほどなく湖亭に行き当たる。懷甫堂である。杜甫は漂泊の旅のさなか岳陽樓に登り、いまなお北方で止まない戦火を憂い、老病のわが身の孤独に泣いた。

昔聞洞庭水 今上岳陽樓

吳楚東南圻 乾坤日夜浮

親朋無一字 老病有孤舟

戎馬闕山北 憑軒涕泗流

盛唐の大曆3(768)年、杜甫は成

都の草堂を後にして揚子江の山峡を下った。病をおして北帰を試みたが内乱に阻まれて果たせず、岳州(岳陽)に至った。昔から聞いていた洞庭湖をいま高樓からながめる。吳(江蘇南部)と楚(湖南北部)の国が湖によって分かれた、湖面は昼夜の区別なく天地を映している。友からは一通の便りもとどかず、老病のわが身にはただ一艘の小船があるのみ。故郷の北方では今なお戦乱が止まず、高樓の欄干にもたれて彼方を見やれば、望郷の涙がとめどなくあふれる。杜甫57歳のときの作である。

小亭の中央には『登岳陽樓』の詩文を刻した石碑が立ち、亭屋には革命の元老朱徳が揮毫した『懷甫堂』の雄渾な三文字の扁額が懸かっている。

ふたたび門をくぐって岳陽樓にもどり、いよいよ登樓する。ゆるやかな弧を描いて藍天に撥ねあがった屋根の形状が美しい。その優美さに、しばらく言葉を失う。屋根瓦のむこうには岳陽樓埠頭がすぐそこに見える。棧橋から広がる遙かな水面に君山の影が煙っている。明日は湖を越え、あそこにむかう。

白銀の盆に浮かぶ一片の青貝

洞庭湖は江西の鄱陽湖とともに揚子江の調整湖として知られる。揚子江の水



位が上がると余分な水が順番にふたつの湖に流れ込み、濁水すると逆に湖から逆流して揚子江の水位を調節する。自然が作った見事な調整システムと云って差し支えない。

岳陽樓埠頭からは南京、武昌、重慶への定期船が就航している。すぐそのように感じられる南京への航路でさえ揚子江を下って48時間もかかるらしい。この大地は、ちよつとスケールがちがうのだ。

乗客が右往左往する快速艇に乗って君山にむかう。君山とよばれているので山そのものと勘違いしてしまいそうだが、じつは洞庭湖に浮かぶ扁平な島嶼にすぎない。島嶼だから陸地と隔絶



竜涎井

された島かと思えば、車で行けるといふ現地人もいる。もちろん島だと言いつ張る人もいる。おそらくどちらも正しいのだろう。つまり、揚子江の水加減によつて島になったり、陸になったりするにちがいない。旅人に旅情を感じさせれば、島でも陸でもどちらでもよい。快速艇の甲板から見る岳陽樓が、朝靄にかすんで幻想的でした。

君山を中国全土に、大袈裟に云えば世界に知らしめたのは、ここに産する銘茶君山銀針である。ついでに巴陵県誌によれば、ここで銀針が本格的に栽培されるようになったのは清の乾隆46(1781)年からであるらしい。その銘茶は190年後、この国が国連の議席を



忠義堂

回復した1972年、中国政府が国連本部で開いたレセプションで各国代表にふるまわれた。

高速艇が接岸した埠頭から小山を登っていくと、頂上あたりで朗吟亭という名前の古建築に出くわす。唐末の酒飲み道士呂洞賓が酔っ払って放吟し、寝込んでしまったからこの名前がついたのだという。朗吟亭をすぎると下りになり、ほどなく眼前に人造池が展開する。太鼓橋が架かり、古船が浮かぶ書割のような中国の伝統風景だ。池の端には竜涎井という井戸がある。君山の五大名水が湧くのだという。銘茶を産するから、名水も噴水するのだろう。井戸の後ろの斜面には緑深い茶畑が広がっていて心地よい。



洞庭北路

人造池には無数の金魚が放たれ、餌を投げ入れると音をたてて群がる。竜涎井の西側には忠義堂とよばれる役所風の建物があり、庭を囲むように執務室や刑房などがあるので、かつては君山の衙門(地方政府)であったのかもしれない。

晩唐の詩人劉禹錫は、君山の高みから洞庭湖を俯瞰した七言絶句『望洞庭』を残している。

湖光秋月两相和 潭面无风镜未磨
遥望洞庭山水翠 白银盘裏一青螺

劉禹錫の讚える白銀の盆とは洞庭湖の美しい湖面で、一片の青螺(青貝)が君山を指していることは説明するまでもない。

洞庭南路の慈氏塔

この町の中心は、站前路から南湖大道を南下して巴陵中路と交差するあたりにある。武漢など他の内陸都市と同じように、ほこりっぽく雑踏している。安普請のビルが連鎖して、見るべきものは少ない。

巴陵中路をまっすぐ西行して洞庭湖方面に進むと広場風の歩行者天国に行き当たった。商業歩行街である。広場の



慈氏塔

真ん中へんで鼓笛隊が行進し、色とりどりの大旗がゆれている。市政府がピオネールのような小中学生を動員して、クリーン都市岳陽を創造する万人署名活動を催しているのだ。久しぶりに見る社会主義的な光景で、懐かしくなる。

商業歩行街を後にして、この町の台所、梅溪橋東大市场にむかう。乾物や鮮魚、日用雑貨など大量の物資が五つ六つのアーケードに分けて商われている。湖南の激辛料理を作る唐辛子や山椒などの食材が圧倒的な迫力で迫ってくる。午後の時間帯に訪れたので買物客の姿は少なく、閑散とした通路でリヤカー引きの男が子供をあやしていた。

これからいよいよ洞庭路を南から北に縦走しようとしている。岳陽散策の最後の楽しみに残しておいたのだ。街路の起点、洞庭南路から数十歩入った湖辺の居民街には、苔むし、べんべん草の生えた慈氏塔が千数百年の風雪に耐えて四周を守っている。唐の開元年間、に妙吉祥という仏教徒が岳陽を訪れ、西から洞庭湖に白竜が暴れこむだろう、と予言した。数日を置かずして風が吹き、波がたち、百姓たちの生活を脅かした。建塔して悪竜の怨念を鎮めなければならぬ。そこへ慈氏と名乗る寡婦があらわれ、喜捨して寺廟を建立し、7層39メートルの塔を建てた。『岳陽風土記』は、(塔は)日の出に洞庭湖の水面にその



影を落とし白竜を鎮めた、と記している。建立費用を喜捨した寡婦を記念し、塔は慈氏塔、あるいは慈氏寺塔と称され、今日まで崩れもせずに残っている。

洞庭路を徒歩で20分も北上すると、巴陵西路を横切って岳陽楼公園にもどってくる。沿道では清代の建築物が現在も庶民の家屋や店舗として使われている。すでに触れたことだが、やはりこの界隈が岳陽の町のいにしえから伝わる品格を守っているようだ。陽は西に傾きはじめている。右に曲がれば宿舍のホテル、左に進めば公園は眼と鼻の先だ。ちよつと逡巡して、岳陽楼を再訪することにした。

再び岳陽楼に登る

登楼すると、西日が湖面を走って水平に差し込んできた。楼を支える朱色の柱が色彩に照りを加える。はね上がった屋根が藍天に滲みる。洞庭湖に落ちる夕陽が鏡のような湖面に反射して黄金色に輝き、行き交う船舶はその光の中で、一瞬、モノクロームのシルエットになる。岳陽楼の入り口に安置された香炉が黄昏の光をあび、観音開きの扉にまでとどきそうな長い影をひいて、息を呑むような美しい光景をつくりだしている。

岳陽への行き方

北京、広州、深 など京広線沿いの都市からは汽車がある。上海からは長沙、または株洲で乗り換え。

岳陽には飛行場がないので、飛行機を利用する場合は、まず、長沙もしくは武漢まで飛び、そこから汽車が長距離バスに乗る。武漢、南京、重慶からは船もある。

岳陽のタクシー

初乗り5.6元。駅から岳陽楼まで約8元。

宿泊

漢森賓館

岳陽市巴陵西路1号

TEL:86-0730-8318888

Email:highsun@mail.yy.hn.cninfo.net

レストラン、ショッピングアーケードなどファシリティが充実。岳陽楼近く。

料金:380元(ツイン)~

中銀大酒店

岳陽市站前西路1号

TEL:86-0730-8270666

Email:joyinn.@public.yy.hn.cn

駅から3分。岳陽市の中心に位置し、移動には便利。レストラン、ビジネスセンター完備。料金:340元(ツイン)~

岳陽楼賓館

岳陽市洞庭北路57号

TEL:86-0730-8321288

岳陽楼に近い。安宿だが、改装したばかりで清潔。換金や切符の手配は保安係が代行。隣接するレストランは安くて美味しい。料金:220元(ツイン)~